HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	源氏物語・橋姫三帖の構造
Author(s)	大朝, 雄二
Citation	北海道大学人文科学論集, 20, 33-59
Issue Date	1984-02-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34369
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_PR33-59.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

源氏物語・橋姫三帖の構造

大朝　雄二

一

橋姫巻から椎本巻を経て総角巻に至る物語――いま仮に橋姫三帖と呼ぶ――は、一般に大君物語と呼び慣わされていて、大君の結婚拒否が主題であるとの理解が広く行われている。たしかに、薫の求愛を拒み続けて短い生涯を終える大君の人生は、男に靡かない女人として正篇に空蟬や朝顔などの先駆はあったものの、そのような女人の生き方が真正面から描き出されるのは、正篇にはなかったことであり、極めて続篇的である。大君の孤立した悲劇的状況が、落葉宮の苦境や紫上晩年の寂寥を承けて造型されているという理解は現在では常識に近いものがあり、大君像が橋姫三帖の主題に深くかかわるものであることは、動かないと思われる。だが、橋姫三帖が大君の結婚拒否を語るためだけに作り出された物語か否かとなれば、問題は自ら別である。それというのも、橋姫三帖の物語展開において、薫と大君の間が男女関係として真に緊張した状況で描かれるのは――大君の結婚拒否が正面から語り出されるのは――、総角巻に至ってからであり、それに先行する橋姫椎本の二帖の段階では、未だ十分に恋物語の実質を備えるには至っていないからである。つまり、総角巻が大君の結婚拒否を語る巻であるのは事実としても、それを橋姫三帖の主題に敷衍することが果して妥当か否かは、問題である。

これまで私は、橋姫三帖に関していかさかの考察を続けてきた。すなわち、橋姫巻で大君に心惹かれていく薫と、弁の君から出生の真相を告知される薫とが、表裏した関係で組み合せられていること。[注1] 薫が柏木の文反故に重く縛られざるをえない状況と、椎本巻で八宮の遺言に規制されざるをえない大君の状況とが、同型の運命に支配される人物像として一対に組み合せられていること。[注2] さらに、柏木

の文反故と八宮の遺言との間に、八宮と薫の最後の対面が描かれていて、八宮が薫に姫君の後見を懇請した事実が、その後の薫と大君の両方に重い意味を持ったこと[注3]、などについて考察を加えたのであった。

橋姫三帖は決して単純に大君の結婚拒否でまとまっている物語ではない。そして、大君の結婚拒否が語られているのも事実である。橋姫三帖の物語の中で大君の結婚拒否をどのように位置づけるべきか、より慎重な検討のつみ重ねが必要と思われる。本稿はこれまでの拙考を引きつぎ、そこで多く論じ残してきたものを補いながら、橋姫三帖の構造を検討し、三帖の主題を見きわめる足がかりを得たいと願うものである。

二

橋姫三帖の構造を把握するために、三帖の主要事項を摘記すれば次の通りである。

橋姫巻

○八宮家の紹介。
○薫、宇治に通って三年経過。
○晩秋、薫、姫君を垣間見る。弁の君の出現。
○十月初旬、薫、宇治再訪。八宮、姫君の後見依頼。同夜、弁の君と再会、柏木の文反故を手渡される。

椎本巻

○二月二十日、匂宮の宇治遊覧。
○七月、薫中納言、宇治訪問。八宮から姫君の後見を懇請される。
○八月、八宮、姫君に訓戒を遺して参籠。
○八月二十日、八宮急逝。
○冬、薫、宇治を見舞う。
○夏、薫、姫君を隙見する。

総角巻

○八宮の一周忌直前、薫、宇治を訪れ、夜、大君に迫る。
○八月下旬、薫、宇治再訪。中君と語り明かす。
○八月二十六日、薫の手引きで匂宮中君と契る。匂宮三日間宇治に通う。
○九月十日、薫匂宮連れだって宇治訪問。
○十月一日、匂宮の宇治遊覧、中君の許に立ち寄らず帰京、大君絶望。
○豊明の節会のころ、大君逝去。

このように整理してみると、いくつかの注目すべき特徴があることに気づく。第一に、三帖を通して同型類似の事件や場面がくりかえされていること。第二に、事件が短期間に集中して語られ、それがおおむね秋から冬にかけての出来事であること。第三に、薫と大君の物語ながら匂宮の存在が無視できないものであること、等々である。当然のことながら、これからの特徴は相互に密接にからみ合って物語の流れを構築している。以下、それを具体的に検討していき

たい。

同型ないしは類似の場面のくりかえしとは、次のようなものである。

(1)薫が姫君たちを覗き見する場面が、橋姫巻と椎本巻末にあること。

(2)八宮と薫の対面の場面が、橋姫巻と椎本巻にくりかえされていること。

(3)匂宮の宇治遊覧が椎本巻頭と総角巻に二度行われていること。

同じような事件や場面がくりかえされるというだけでは、橋姫三帖に固有の特徴とはいえないのであり、正篇物語にも多く認められる現象であった。たとえば、六条御息所の物怪がくりかえし出現すること、死んだ愛人の忘れ形見がくりかえし光源氏の懸想の対象になること、光源氏の住吉詣が澪標巻と若菜下巻にくりかえされていること、同型の心理や情念がくりかえし描かれていることなど、枚挙にいとまがないといって過言でない。何よりも女三宮事件が藤壺事件との照応として位置づけられるところに、正篇の根本的な骨格があると考えられるのであり、清水好子氏が若菜上下巻に〝くりかえされる過去〟を論じられたことが想起されるのである。[注4]

さすれば右に指摘した橋姫三帖でくりかえされる場面も、源氏物語の作者が好んで用いた技法論に落ちつくのかとなれば、事情は明らかに異なっている。正篇四十一帖は光源氏の生涯というおのずからなる長篇展望の下で、大きな波が遠くからうち寄せうち返すように、時を大きく隔てて事柄がくりかえされるのに対して、右に指摘した橋姫三帖の場合は、丸二年余という限定された短い期間に生起する現象である。この相違は大きい。正篇における光源氏の一代記という体裁は、単なる外形の問題ではなく、すべてが光源氏に収斂する単一焦点の語りであるところに特質があった。そして、光源氏の上に流れる生活的レベルの時間が持続して語り出される様態であるがゆえに、くりかえされる過去が光源氏の人生史で固有の意味を帯びるのであり、それぞれの場面で痛烈な実感の表現になっていたのである。それに対して、橋姫三帖の物語は正篇における光源氏世界の如き自立する世界が、すでに存在しないという大前提から始められているのであって、求心力として働く唯一の主人公が存在しない物語には、貫かれる生活的時間の継続性など望むべくもないのである。言い換えるならば、続篇はすでに年立の有効性を喪った物語になっているのであり、必然的に人物本位＝事件本位の構造にならざるをえないものである。しかるがゆえに、橋姫三帖にくりかえされる三つの事件は、それ自体の意味が問題になる必然がある。

橋姫三帖が足かけ三年の内容であることは、薫と大君の物語の本質にかかわる問題を孕んでいるように思われる。ある年の晩秋の垣間見から始められた物語は、その翌年の秋に八宮の死が語られ、その又翌年には大君の死で否応なく結着がついてしまうのが、薫と大君の物語の実際である。このまとまりの良さが、三帖をして大君物語と呼ばせる理由なのだが、これが正篇物語であるならば、何はともあれ光源氏世界が確立していて、そこにある女性が登場し退場していくという形になるのである。たとえば玉鬘十帖を玉鬘物語と俗

称するのと大君の場合は本来的に異質であることに注意する必要がある。橋姫三帖は疑いもなく一つの物語の発端から完結までが語られているのであり、大君の死後にいかにして物語が継続しえたのかが重要な論題にならざるをえない。

三帖が足かけ三年・丸二年余の期間であることは、秋から冬にかけての三つの場面のつみ重ねであると捉えることができる。橋姫巻後半部は薫の晩秋と初冬の二度の宇治訪問であり、総角巻は八月中旬から十一月の大君の死まで三ヵ月余を含むが、特に八月中に事件が凝集している。その中にあって、椎本巻のみが春の匂宮の宇治遊覧から始められ、翌年夏の薫の隙見の事件まで、一年余の期間の物語になっているのが特徴的である。

おおよそ、四季の運行をなぞる形で物語が進行し、複数年の内容を持つのが正篇の基本スタイルであったという意味では、椎木巻の形態は正篇に準じている。そして、宇治十帖にあっては椎本巻のように一年以上の歳月を含む巻は、宿木巻と手習巻があるばかりであって、あとは季節単位の短い期間で語られる巻である。その場合、宿木巻は大君没後の新しい展開を模索している巻とおぼしく、薫の結婚相手である今上の女二宮を新しく登場させてくるために、遡って状況を説明する上で必要であった時間の幅であり、おのずから例外である。また、手習巻が一年余の内容になっているのは、浮舟巻における緊張した三角関係が浮舟の失踪という形で崩れていった後日談の如きものであるためであり、浮舟が物怪にとり憑かれ正気を失っていた期間も含まれるためである。それゆえ、橋姫巻後半部や総角巻の如く、短期間に凝縮して事件が展開する形態が、宇治十帖の基本スタイルと認定されるのであり、それはとりもなおさず、事件本位に物語が進行している特質に外ならない。

このように見てきたとき、椎本巻のみが春の場面から季節を追って物語が進行し、翌年の夏にまで至る一年余の内容になっているのは、正篇のスタイルを彷彿させるものであるのだが、椎本巻頭の春と巻末の夏の場面とは、共に先に指摘したくりかえされる場面の当該部分であることに注意したい。すなわち、椎本巻頭の春の匂宮宇治遊覧と総角巻の初冬における匂宮の宇治行とは、同じ行事である分だけ、背後の物語状況に対する意味の違いが鮮明になるはずのものであり、物語全体としてはその間の落差が問題となるはずのものである。薫の垣間見がくりかえされるのも、事情は全く同断なのであって、第一回の垣間見と第二回のそれとの間には、薫と姫君をとり囲む状況が明らかに激変していることにこそ問題があるのである。なお、これらは改めて後述したい。

椎本巻頭の場面も、巻末の夏の場面も自立して固有の意義を主張するものではないとなれば、椎本巻の本体は秋から冬にかけての物語場面、八宮の薨去を頂点とする事件展開であると認定してしかるべきであろう。その結果、橋姫三帖の物語は、三つの秋冬の場面を重ねることで丸二年余の内容を含み、三つの事件のくりかえしで成り立つものと整理することが可能であると思われる。これは、語り出される事件の各々がそれ自体の意味を主張するのは当然として、他の事件と接触することで全く新しい意味が合成され、その連鎖で

ストーリーが押し進められていっているのが、橋姫三帖の物語の実体なのではないか、ということである。言い換えるならば、橋姫三帖は事件と事件との相互干渉を通して物語が進展していく事件本位の構造と考えられるのであるが、問題はそれがどのように具体化されているかである。

三

右で見てきた橋姫三帖の特徴をいま一度整理するならば、

A　薫、姫君を垣間見る。（晩秋）
B　薫、八宮と対面（初冬）　以上　橋姫巻
C　匂宮の宇治遊覧（春）
B′　薫、八宮と対面（秋）
A′　薫、姫君を隙見（夏）　以上　椎本巻
C′　匂宮の宇治遊覧（初冬）

の如くとなる。ここでABCの事項がB′A′C′と順序が狂ってくりかえされてくるのは、橋姫巻ABの後に弁の君が薫に出生の秘密の全てを知らせる事項が位置し、椎本巻CB′の後に八宮の遺言と薨去が介在することの直接の影響である。すなわち、橋姫巻における薫にとって最大の事件は、弁の君から秘密の一部始終を聞き、かつ、決定的な証拠の品である柏木の文反故を手渡されることであった。一方、椎本巻の頂点は八宮の薨去にあることは自明であり、それに先立って遺言となる生きる上での心構えを諭す訓戒も、その一環である。そして、総角巻が大君逝去を最大の事件とするものなのであって、右に記したABCとB′A′C′のくりかえされる事件構成は、甲・柏木の文反故、乙・八宮の遺言、丙・大君の逝去という橋姫三帖の骨格たる三つの秋冬の事件の間にちりばめられた挿話に外ならないのである。

A　薫の垣間見。
B　薫と八宮の対面。
甲　柏木の文反故。――以上　橋姫巻
C　匂宮の宇治遊覧。
B′　薫と八宮の対面。
乙　八宮の遺言と薨去。
A′　薫の隙見。――以上　椎本巻
C′　匂宮の宇治遊覧。
丙　大君の逝去。――以上　総角巻

橋姫三帖の物語の構造を考えるということは、右の如くに整理できる事件の展開の内的な連関を、いかに把握できるかにかかっていると私は考える。

薫と八宮との対面、すなわち八宮が薫に向って姫君の後見を依頼する場面が、橋姫巻と椎本巻に二度描かれていることについては、先の機会に考察を加えたところであり[注5]、ここで再述するのは避けたいのであるが、本稿の意図する範囲で言うならば、似通った二つの場面ながらも、橋姫巻のそれと椎本巻のそれとの間には、ほとんど正反対の方向性を持っていることに注目したいと思う。橋姫巻では

薫の先夜見た姫君をゆかしがる心に先導された場面であるのに対して、椎本巻のそれは八宮が薫を婿がねに扱うという積極性で主導されている違いがあるのだが、その依って来る理由は、橋姫巻の対面の直後に、薫が弁の君から真相を余すところなく知らされてしまった、という展開になっているところに求められるだろう。つまり、二つの対面の場にあって、薫の側の状況が急変しているのである。

全く同様のことは薫の垣間見の一件についてもいえる。橋姫巻での垣間見から開始された薫と大君の物語は、椎本巻末でもう一度、喪服姿の姫君たちを隙見する場面が描かれてくるのであるが、椎本巻末の場面は姫君の喪服姿が雄弁に物語っているように、それは直前に詳述された八宮の薨去を体験した姫君の姿という点で、橋姫巻とは根本的な違いがあるものである。

すなわち、橋姫巻から椎本巻への展開は、橋姫巻が薫に視点を集中した物語であるのに対して、椎本巻は父宮に死別する大君の閉塞した状況を語るのに集中していて、それが合流したところに総角巻が位置している、ということができるのではないか。橋姫三帖を大君物語と捉え、その結婚拒否を主題と考える解釈では、椎本巻における遺言となった八宮の訓戒を最重視するのは必然である。しかしながら、橋姫巻の薫に注目するならば、薫像にとって最重視すべきものは弁の君によってもたらされた証言と証拠の文反故であることは動くまい。つまり、橋姫巻が薫、椎本巻が大君と語り分けられた上で、薫と大君の物語としての総角巻の展開になっていると考えられるのだ。

その場合、柏木の文反故と八宮の遺言とを繋ぐものとして、椎本巻での薫と八宮の最後の対面が位置しているものの如くである点に注目したい。遺言という意味では、八宮が薫に姫君の後見を懇請したのも、結果的に薫に対する遺言となったものであり、薫はそれに強くこだわることになる。そして、大君も遺訓の他に、八宮が薫との結婚を切望していたことにこだわらざるをえないのであって、橋姫・椎本の事件はこの上なく綿密に組み合せられている。八宮が薫に姫君との結婚を含む後見を依頼したのは、個人的に秘かになされたものではなく、八宮の意志を奥に居た大君も確認している。だからこそ、八宮の勧めに従って大君は薫に聴かせるために、箏の琴の演奏をするのであった。その時点では、大君は薫との結婚を拒否するいかなる理由も持ち合せていない。と同時に、八宮の懇請があったからとはいえ、薫の方から姫君の琴を所望した状況でいえば、薫が大君と結ばれる未来は、この椎本巻の段階では十分に予想されるものであったといわなければなるまい。しかるに、実際の総角巻の物語展開は、愛し合う薫と大君とが遂に結ばれることなく終っているのであって、二人が結ばれなかったのは、決して大君が一方的に薫を拒んだからではない。八宮から遺言でもって姫君の後見を依頼された薫が、なぜ大君と結ばれないまま終ったかという発問を無視して大君の結婚拒否のみを問題にするのは明らかに片手おちである。

四

橋姫・椎本から総角へという問題が、典型的に現われているのが総角巻の発端の一夜である。八宮の一周忌の直前に宇治を見舞った薫が、その夜大君に迫る場面は十数ページの分量でもって薫の口説や大君の嘆きなどが細叙されていて、総角巻の一つのハイライトになっている。いまその場面の逐条的な検討は省略に従いたいのであるが、激情に駆られた薫が遂に実事に及ぶことなく一夜を明かすことは注目に値する。

この点に関して現在与えられている説明は、薫の類稀な道心のゆえであるとし、薫は肉体の愛よりも精神の愛を選んだと解くのが、おおよそ一般であるようである。薫を道心厚い理想人物と把握すると同時に、観念的退嬰的な人物であるという評価が広く支持されていることでいえば、遂に大君と結ばれることなく終ってしまった薫について、右のような理解がなされるのは、けだし当然といえるのだが、あまりに結果論にすぎはしまいか。つまり、なぜ薫が性行為に及べなかったのかを問う視点のないまま、性行為に及ばなかった薫を観念的な人物を評することに、私は疑問を持つのである。殊更めいて言うまでもなく、〝観念的な人物〟がいかに〝具体的〟に描き出されているかに、物語の達成があるのであって、観念的な人物だから観念的に描かれているというものではない。

一方、吉岡曠氏は総角巻の結ばれなかった一夜について、次のように論じられている。

この夜二人が結ばれなかったのは、大君が薫を拒否したからではなく、いったんは女の部屋に強引に押し入るという積極的な行為に出た薫が、大君の気持を受けとりそこねることによって、その行為を中断したからだということである。この誤解は薫のやさしさだといってよい。しかし、宇治十帖という物語の全体を視野に入れると、時には限りなくやさしく、時には限りなく冷酷に顕現する薫の「生の動機」が、この一夜のありようをその最も深いところで決定したといったほうがよいのである。

と説かれて、「いったんは男と結ばれることを覚悟し、覚悟を決めた後は、ひたすら喪服のやつれ姿を恥じた女心のゆくえ」を問題にされている。[注6] この吉岡氏の大君論は極めて注目すべきものである。すなわち、この夜に二人が結ばれなかったのは、大君が薫を拒んだからなのではなく、薫が実力で大君を従わせることをしなかったからである、という視点はこれまでの総角巻論あるいは大君論で見逃されてきたものであった。もちろん、大君の驚き嘆く姿に薫がひるんだのであり、服喪中の雰囲気が薫の気力を殺いだのは確かであり、薫が積極的な行為に出れないような状況が、綿密に張りめぐされていた。しかしながら、もしここで薫が強引に振舞い二人が結ばれたと仮定したならば、大君に全く違った人生があったのは明白である。たとえそれが匂宮と結ばれた中君の人生の如きものであったとしても、である。その限りにおいて、大君の結婚拒否のみを強調するのは、物語展開の実態に必ずしも即しているとはいい難い。大君が結

婚拒否を貫けたのは、薫が大君を実力で犯さなかったからだ、という一面は確実に存在する。その点を衝かれた吉岡氏の識見に敬意を表したいのである。

そもそも、吉岡氏は薫を理想人物と捉える通説的理解に反対され、薫が「かなりいや味なところのある人物」と認識するところから独自の薫論を開陳されている。[注7] すなわち、薫の「道心」は「主観に即した解釈」にすぎないとされ、それが読者には了解されるような「二重の語り口」が採用されていると論じられて、薫を「現実喪失者」と規定されるのは傾聴すべき卓見であった。

しかしながら、右に引用した吉岡氏の総角巻の一夜に関する解釈については、必ずしも全面的に賛成できかねるものがある。女人の部屋に押し入り、大君を抱き寄せて「みぐしのこぼれかかりたるをかきやりつつ見給」（六の24ページ）[注8]ような状態にまで及びながら、遂に何事もなく一夜が明けたことで大君が致命的に傷ついたという解釈は、大君の心事に立ち入って言うならば成り立つだろう。その時に大君が男と結ばれることを覚悟した、と読むのは必ずしも深読みにすぎるとは思わない。だが、それは薫が大君の気持を受けとりそこねたためだと解され、それが薫のやさしさであるとされる点に、私は賛成できない。言葉尻を捕えるようで恐縮なのだが、その時の「大君の気持」とは何なのであろう。結ばれることを覚悟したことと、結ばれたいと願ったこととの間には、やはり決定的な相違があるといわなければなるまい。もし吉岡氏がこの時の大君の気持について、結ばれることを覚悟した次の瞬間に、結ばれたいと欲したというが如き心理の展開を読まれるとしたならば、それはあまりに近代主義的解釈にすぎよう。そしてまた、心ならずも結ばれることを覚悟した大君の心情が哀れで、薫はそれ以上の行為に出ることが叶わなかったと読むならば、それは決して薫が大君の気持を受けとりそこねたことにはならないのである。

吉岡氏は行為を中断した薫の「やさしさ」を問題にされ、「時には限りなくやさしく、時には限りなく冷酷に顕現する薫の『生の動機』」と説かれる。この「生の動機」なる用語は石田穣二氏が大君を論ずる際に用いられたジンメルの言葉の由であるが、何とも難解である。この言葉を吉岡氏が「自分の根源的な、説明しがたい意志」「この人間の内奥と必然性」と言い換えておられるのを手がかりにすれば、この一夜で薫が大君を犯すに至らなかったのは、〝薫自身の根源的な説明しがたい意志〟ということになるものの如くである。これまた、薫自身の心事に即するならば妥当な説明と思われるのだが、物語論としては、そのような薫の内的必然がいかに語り出されているものなのかが問題になるはずである。これは吉岡氏が薫の道心を「主観に即した解釈」とされ、読者にはそれが了解される「二重の語り口」になっていると論じられたことが、そっくり当てはまるものではあるまいか。つまり、薫自身としては説明不能の根源的な意志に支配されて、行為を喪ってしまったことが、物語の読者には納得できる語り方になっている、と考えてしかるべきではあるまいか。私は薫を捉えてはなさない〝根源的な、説明しがたい意志〟のよって来る由縁が、柏木の文反故によって象徴される血統にかかわる秘密であっ

た、と考えたい。

すなわち、薫が大君を抱き寄せながら綿々たる口説に終始するのみで、遂に性行為に及べなかったのは、薫が偽善者であったり道心が邪魔したりしたからではなく、橋姫巻末で己れが不義密通の子である事実を完膚なきまで思い知らされた薫、という物語状況が先行していて、その必然的な結果として、薫が一種の性的不能者として描かれている、ということなのではあるまいか。薫が大君との結婚について必ずしも熱心でなかったことは、椎本巻で八宮との最後の対面の折、懇ろな依頼を受けたのちに、「わが心ながら、なお人には異なりかし、かばかり御心もてゆるい給ふ事のさしもいそがれぬよ……」(五の259ページ)と、自分の心をいぶかる思いが語られているのであって、総角巻の一夜で薫が大君を犯すに至らない展開は、すでに予見されるものであった。しかして、ここでいかに薫が綺麗な口をきこうとも、それを一般的な道心論に拡散されるべきではないのであって、作者が語り進めてきたこれまでの薫の体験の総和であるというべきものである。

五

右に見てきたように、私は続篇物語の薫を考える上で、橋姫巻末に描かれる弁の君＝柏木の文反故に代表される事件を最重要視したいのであるが、現在の宇治十帖論あるいは薫論の大勢は、それを無視とまではいかなくても軽く扱っているものの如くである。たとえば、鈴木一雄氏は弁の君にまつわる物語状況を「容易に恋愛の発展を許さぬ用意でもあったであろう」と一往の評価を下されながら、

「匂宮」の巻以下、強く押し進めてきた薫造型、新しい人物造型の、これは追認であり念押しである。薫的人間像はすでに輪郭が出来ている。薫は柏木の遺言状をも手渡される。母女三宮にも告げず、心ひとつに納めて悩むところで巻を閉じているが、弁との出会いの後も、その性格にさして変化を生じていないというのも、薫の歩みがすでに決定しているからなのである。

と論じられている。[注9] また、同様にして鈴木日出男氏も、

彼が年来抱き続けてきた出生への懐疑は、そのために現世厭離へ傾斜もするのだが、それ以上に宇治に密接たらしめようとする作者の用意といって過言であるまい。その証拠には巻末で明かされるその出生前史がその後の薫の心をさほど重大には占めていかない。しかも弁は後に、大君と彼の間の最も重要な媒役として、また大君死後では大君思慕の地宇治の象徴的存在ともなるのである。いまわしい過去の秘密をにぎった者とにぎられた者という関係が媒介しあって二人を密接ならしめるといってよい。

と論じられた。[注10] 鈴木一雄氏はすでに薫像の輪郭ができ上っていて、その追認であり念押しであると捉えられ、鈴木日出男氏はその後の弁の存在が、薫を宇治の地に密接ならしめる重要な媒体に機能している点に注目されるのである。両氏によってこのような把握がなされるのは、弁の君により真相の告知があった後にも、薫は「その性

格にさしたる変化を生じていない」、「その後の薫の心をさほど重大には占めていかない」という認識によってである。たしかに、薫は幼少の折にすでに出生の秘密のほぼ全容を察知していたことが匂宮巻で語られており、そのために橋姫巻での弁の君の出現にも、その語る内容についても、寝耳に水の驚きはなく薫はことさら平静を装うものに描かれている。そしてまた、総角巻以下の物語で弁の君が薫にとっての最大の味方であり、手足のように働いているのも事実であって、両鈴木氏の所見は各々重要な問題を含んでいる。だが、そこで私がこだわるのは、弁の君の出現と真相の告知にまつわる経緯が作者によって綿密に仕組れた極めて意図的なもの、と考えられる点についてである。橋姫巻後半部に語られる薫の二度の宇治訪問は、薫が垣間見その他により大君に強く心惹かれていく展開であると同時に、父母の密通事件の生き証人の出現がからみ合って語り出されるものであって、話題としてこの二つを切り離しどちらか一方に力点を置くといった底のものではない。つまり、二つの方向性を持った事柄が、表裏一体となって薫の体験として描かれているところに、橋姫後半部の特徴がある。

その場合、匂宮三帖を含めた続篇物語にあって、薫をめぐる具体的な物語場面の成立が、ほかならぬこの橋姫巻の後半部であることに特に注意したいと思う。薫が出生の秘密を察知したと語られる匂宮巻は、おおよそ概括的な説明に終始しており、巻末になって夕霧右大臣の賭弓の還饗の場面が描かれたところで、急に巻を閉じている。また、竹河巻の薫をどう把握するかは、今日に至るも定説を見ない難問になっているのだが、竹河巻も匂宮巻末場面と同様に、未来に伸びていくような固有の物語状況の提示のないまま、中絶同然に巻を閉じている。だから、鈴木一雄氏が説かれる「薫的人間像はすでに輪郭が出来ている」というのは、匂宮巻において続篇の主役としての薫像の基本設計図ができていたということに外ならず、橋姫巻後半部での具体的な場面展開の中で薫が真相の認知に達することこそが、まさしく物語的実体なのである。つまり「輪郭」として理念的に方向づけられていたものが、いかにして具体的な〝肉づけ〟が果せるかが、すなわち物語創造の営みなのではないか。

匂宮巻で語られる薫は、独自の推理で秘密を知り、そのために恋にも出世にも関心を持てない青年に生い立ったと語られている。それは反物語的人物としての薫という独自な輪郭の提示であった。その反物語的性格とは薫の血筋の正統性への疑惑に発するものであるゆえに、反光源氏的であることと同義になる方向性を持つものであった。それが反みやこの物語空間「宇治」に、反光源氏の桐壺院八宮の一家という人間関係を設定するに及んで、匂宮巻で示されていた基本設計図が初めて立体化された物語構造となると考えられる。しかも、薫が宇治の八宮に親しんで通うようになって三年が経ったと記された直後、八宮不在の夜に薫が姫君たちを垣間見る事件が描かれて、それが具体的な薫と大君の物語の開幕になるのであった。その垣間見の夜に弁の君が初めて姿を現わすのであって、薫が出生にかかわる真相を確認することによってのみ、薫の物語を語り進めることのできた作者の意図が窮えるのである。それゆえに、匂宮巻で

語られていた「輪郭」としての薫像が、橋姫巻で具体的な体験を通して描かれてくることで物語的実体たりえたというべきものと思われ、「追認」「念押し」と説かれる鈴木一雄氏の把握には賛成できないのである。これを薫の出生の秘密という一事に絞るならば、ほぼ全容を察知していた事を改めて確認を迫ったものにすぎないとも評せようが、前述のように、薫が二夜に分けて真相を知らされる展開は、そのまま薫の大君に向う心の動きと表裏する関係で組み合せられている以上、単に薫に事実を確認させるためのエピソードなのではなく、真実を確認したあとの薫にあって大君への思いにいかなる影響があるものなのかが問題にならざるをえないものなのである。

物語展開に即していえば、匂宮巻に語られている出生の疑惑が薫をして宇治へ向わせているのであって、それが純粋な道心の発現と解するわけにはいかないのは、先に触れた吉岡曠氏の主張される通りである。光源氏の実子でないことを思う薫だからこそ、光源氏の栄光の支配している京の世界を離脱して、宇治の八宮の反光源氏の暗さに吸い寄せられていったのである。その宇治の地で生き証人の証言と明白な証拠の文により、一点のくもりもない事実として眼前したとき、本来ならば薫は宇治の地をも離脱しなければならなかったといえよう。残された唯一の道は出家遁世である。もちろん、ここで薫が遁世してしまえば物語が自動的に終結してしまうのであり、薫を遁世させるわけにいかなかったという即物的な事情もあるが、それは同時に、この段階では出家遁世が物語の主要なモチーフになるには至っていなかった証拠に外ならないだろう。

柏木の文反故に代表される一連の事件が、薫に大きな衝撃を与えたと解するのが、穿ちすぎあるいは深読みにすぎるとは思わない。それは己れの出生にかかわる密通事件の一切を明白な事実として認識する人物像として、薫の物語の主役たる造型が完成することを思うからである。宿世によって憂愁に沈む貴公子像といった曖昧さでなく、また、夢の告げのような超自然的な力が働いて真相に達するのでもなく、極めて現実的であり具体的な過去が事実として眼前することにより、薫は否応なくそれに縛られざるをえないという形で、特立する人物たるのである。光源氏のように衆に絶して聳え立つ理想人物としてではなく、過去に縛られて決して飛翔することのできない人物として薫は、物語の内にしか存在しない人物となるのだ。本当をいえば、夕霧右大臣その他が誰も薫の素姓に気づいていないというのは、物語的なご都合主義以外の何ものでもない(もっとも、夕霧は真相を知っていて光源氏の名誉のために知らぬふりをしている、という解釈もあるらしいのだが)。しかしながら、誰も気づいていない深刻な秘密を、薫自身が全て知ってしまう悲劇的な孤立性によって、他と区別される特別な人物たりえている点に私は注目したいのである。父柏木の軽率な情熱と母三宮のいうかいのない幼稚さの結果として、いま己れが地上に存在することを自覚した薫に、女性関係としていかなる未来がありうるのか。その答えが総角巻の一夜で遂に実事を持つに至らなかった薫であるのだ。本来ならば出家遁世もすべき薫でありながら、心弱く叶わなかった代りとして、現実における一切の行動を喪失し、ひたすら内向し屈折する心理だけ

の人物像としての薫が、橋姫巻末で完成すると考えられるのである。

薫が物語史上空前の人物であることは夙に清水好子氏が喝破されたのであったが[注11]、そのような薫像が真に確立するのが橋姫巻末であった。そして、橋姫巻後半部が薫を中心に物語の進行していたのは、薫が物語局面を背負って立つ主人公であったからなのではなく、逆に薫が物語を主導する力を完全に喪失した主役であることを、物語に確認してくるための手続きであったと理解されるのである。

六

右に述べてきたように、続篇の薫像が完成するのは、彼が真相を確認した橋姫巻末であると私は考えるのであるが、それは弁の君出現の後も薫の性格にさしたる変化は認められないとする鈴木一雄氏、鈴木日出男氏の所説と著しく相違するものになっている。椎本巻以下の薫がそれ以前とくらべてどこが違い、どこが違っていないかの検討は避けて通ることのできない課題となる。

橋姫巻末が十月初旬で終り、椎本巻頭は二月二十日、匂宮が初瀬詣の中宿りに宇治に立ち寄る場面で始められている。この冬から春への季節感の推移が、薫を主役とする場面から匂宮を主役とする場面への転換となっている点に注意したい。本稿の最初に指摘した匂宮のくりかえされる宇治遊覧の場面であり、更に、橋姫巻と椎本巻頭の匂宮との対照は、すでに早く森岡常夫氏が季節感の問題として論じられたものであり[注12]、意図的対照的に語り出されていることは疑えない。その場合、椎本巻頭で匂宮が唐突に現われるものでなく、橋姫巻で薫が匂宮の好き心を刺激するべく宇治の姫君の噂を吹聴したためである。それゆえ、薫自身が匂宮を呼び出してきたのだから窮極には薫論の範疇に属するという考え方もありうるだろう。そこに薫の俗物性や矛盾した心などさまざまに論じられるいわれがある。しかしながら、これを薫の人物論で割り切るのは、問題を矮小化することになりはしまいか。たとえば、橋姫巻で匂宮の好奇心を刺激した責任をとるかの如く、薫が総角巻で匂宮を中君の寝所に導き入れる仲介者の役を演じているのは、どう考えてみても薫のやりすぎの印象は否めないものがある。大君が妹と薫の結婚を考えている機先を制して、中君と匂宮の既成事実を作り上げた上で、大君を我がものにしようと考える薫の思惑は、それなりに辻褄はあっているものの、総角巻の発端の一夜で何事もできずに終った薫という意味では、思惑倒れになるのは目に見えているといわなければならない。もっとも、そのような姑息な思惑を働かせ、自身以外の事に妙に熱心になるところに、行動を喪った人物の特徴が顕著に著われているとはいえるだろう。つまり行動を喪った薫が、代償行為として匂宮を事件に巻き込んでくることによって、物語の進行が果されているのである。それは、薫論の問題である以上に、少々の無理を犯してでも匂宮を物語に介入させて、そこで物語局面の展開を企図している作者の構想の問題として捉えるべきものなのではあるまいか。

橋姫三帖が薫と大君の物語として語り出されていることは明らかであるのだが、三帖を通して匂宮の存在は決して小さいものではな

い。それは続篇物語は薫を唯一の主人公とする物語なのではなく、薫と匂宮の二人を主役とする根本構想が先在していて、その結果として薫が匂宮をわざわざ事件に呼び入れてくるような、一見したところ不自然な経緯がくりかえされているのではなかろうか。この「二人の主役」の問題は、匂宮の冒頭で「当帝の三の宮、そのおなじ御殿にて生ひ生で給ひし宮の若君」と一対で語り出されたのを皮切りにして、「匂ふ兵部卿、薫る中将」と併称されていること、紅梅巻が匂宮、竹河巻が薫と語り分けられていることなど、多くの徴標によって続篇始発の根本構図であったらしいことが窺えるのである。そして、薫と匂宮の二人を主役とする物語は、後の浮舟をめぐる状況により完全な物語的達成を見ることは広く知られているのだが、その問題が橋姫三帖にあっても決して無縁でないのは注意する必要がある。

本稿では〝二人の主役〟の課題に深入りする余裕はないのだが、椎本巻が匂宮を主役とする場面で開始されるのは、匂宮の登場によってのみ物語局面の展開が果せたということに外ならず、とりもなおさずそれは、橋姫巻末で薫が行動を喪い内面に屈折するだけの心理家として、物語局面を主導する主人公ではありえないことに対応しているのである。

椎本巻頭は匂宮の主役とする場面で開始されることにより、橋姫巻末場面とはがらりと変った雰囲気になっている。光源氏直系の親王の小旅行にふさわしく、殿上人はいうに及ばず上達部もあまた随従して、京には残る者が少なかったと記されている。中でも夕霧右大臣の子息たちが列挙されていて、いうならば源氏ファミリーが一族の希望の星を盛り立てている盛儀であり、源氏一族の権勢の程を強く印象づけるものになっている。ここに薫が加わっているのは源氏一族として当然のことであり、半ば公式行事の趣きを呈している限り、匂宮が主役で薫が傍役に回っているのに何の不思議もないのであるが、薫の血統にかかわる自己同一性の問われた橋姫巻末に直結している場面であるだけに、極めて皮肉な状況といわなければならないのである。たしかに、この匂宮の宇治遊覧の場面でも、薫は「宰相は、かかる便を過ぐさず、かの宮に詣でばや、と思せど」（五の250ページ）と、八宮方への関心を示すものと語られていて、鈴木一雄氏、鈴木日出男氏が説かれるように柏木の文反故の後にもさしたる変化は認められない、という解釈が妥当であるかの一面はある。しかし、ここでは光源氏の実子でない事実を明白に自覚したのちの薫が、それでもなお表面は源氏ファミリーの一員として何気なく振舞っている点にこそ、注目しなければならないのではあるまいか。それは対岸の優雅な管絃の遊びを耳にして感慨にふける八宮が、その中から致仕大臣一族の笛の音色を敏感に聞き分けて不審がるところにも現われている。つまり、源氏ファミリーの中での致仕大臣系の笛という異質性が、まさに薫を捉えて離さない苦渋であったはずなのである。

そこで注意したいことは、匂宮と薫とが対照的に描き分けられていることが、対立する性格というが如き近代主義的な解釈の入る余地のない点についてである。匂宮はあくまでも今上の后腹の親王と

して描かれるものであり、いうならば正篇世界の光明を引き継ぐ「類」の代表である。そして薫は、これまで縷説してきたように、表面は光源氏の子息でありながら実は不義の子であるという特殊な状況が背負わせられているのであり、光源氏の光明の底にひそんでいた暗部が託された人物として「個」であるといえるだろう。この明と暗の対比が、類に対する個として描かれるところに、椎本巻の構想的意義があると考えられる。

しかも、この明と暗、類と個の対比が、匂宮と薫の間だけの問題ではなく、八宮をも引き込んでくることで、物語局面の次なる展開に結びついているのは注目に価する。すなわち、匂宮が宇治川を挟んで八宮邸の対岸にある夕霧右大臣の別荘に遊ぶという位置関係なのだが、その別荘とは六条院光源氏から伝領したものと説明されている。つまり、光源氏――明石中宮（夕霧右大臣）――匂宮の三代の栄華に外ならないのであるが、それは橋姫巻で語られていた八宮の落魄の人生史に直対するものである。橋姫巻では宇治は京からの距離の大きさによって特徴づけられて、脱俗の土地のイメージが強く前面に押し出されていたのであるが、この匂宮が夕霧の別荘に遊ぶ事態に及んで、宇治が必ずしも世俗から断絶した〝異郷〟ではないことが明らかになるのである。宇治が〝憂し〟の名によって反俗の地であると同時に、平安貴族の別荘地でもある二面性が、宇治川を挟んだ「あちら」と「こちら」で描き分けられてくることにより、物語は橋姫巻とは全く異なる現実的視点が導入され、新しい局面の展開を見ることになる。陽の当る場所と日蔭の場所とが、宇治川を挟んだ同一空間に対置されることにより、日かげの世界のみじめさが際立つのであり、八宮は光源氏三代の栄華を目のあたり見て己れの虚しく流れた過去を思わずにはおられなくなり、それが己れの亡きあとの姫君たちの未来を思って、現実的な対応に迫られざるをえなくなるものに結びついていく、それが以下の椎本巻の具体的な内容となるのであった。

匂宮はまさしく「明」の世界の代表として登場している。それも単なる権勢の大きさというのではなく、光源氏直系の孫として物語内の歴史を担って正統性を代表する存在である点が重要と思われる。すなわち、そのような匂宮との対比によって、薫および八宮の位置が改めて鮮明化されてくる点に、私は注目したい。八宮が俗聖と呼ばれながら、なおかつ現世を捨てきれないのは、もちろん二人の姫君のためであったのであるが、その八宮を支えていたものが宮家の誇りであったことは、姫君への遺言となった訓戒が如実に物語っている。八宮は現世的な栄光の全てを喪いながら、というよりも喪ったがゆえに、最後に残された血の尊さだけに固執せずにはおられなかったという意味で、八宮もまぎれもない宮廷人であった。そして、薫もまた、光源氏の実子でないことを確認した現在も、宰相中将たる現実は放棄できないことで物語内に留まっているのであって、薫も八宮も共に宮廷社会と完全に絶縁した状態で宇治にいるわけではないことが明らかになるのである。言い換えるならば、匂宮という現実的な視点を導入することによって、薫も八宮も宗教的な色あいで過度に理想化される危険から解き放され、共に宮廷社会の枠内に

生きて現実のしがらみを持つ生ま身の人間たらしめることに成功しているのだ。

匂宮と薫、匂宮と八宮という対照的な人間関係の設定は、必然的に薫と八宮との対比をも浮び上らせてくるところに、この匂宮登場のもう一つの意義がある。匂宮の正統性に対する薫の異端性は、薫が八宮側の人物であることを指し示すものでありながら、匂宮と対比される八宮の側から見れば、薫は今を時めく宰相中将として、所詮は「あちら」の側に属する人間である。そして、薫自身も匂宮の側でないことを自覚しながら、なおかつ宰相中将であることを捨てることができない矛盾を抱える存在である。つまり、京の匂宮と宇治の八宮という二極があり、そのいずれでもあり、いずれでもない両方に跨がる薫のありようが鮮明になってくるのである。この帰属する世界を持たない不安定な状況に置かれる人物、という問題は、このあと浮舟像の造型として改めて物語構想の核に据えられてくるものであるが、そもそも薫の自己同一性の問題として捉えられるものであったのは注意してよい。

本稿で細かに考究する余裕はないのだが、総角巻でくりかえされる匂宮の宇治遊覧も、基本的には椎本巻頭と同軌のものと理解できる。すなわち、八宮が対岸の匂宮の権勢の程に衝撃を受けたのと全く同様に、総角巻では大君に改めて宮廷社会の実際を思い知らせる事件として存在し、そのために大君は絶望するのである。その折の匂宮の宇治行にも薫中納言が随行している。匂宮が中君の許に立ち寄ることなく素通りで帰京することで、大君は彼女独自の強い思い込みでもって、匂宮の不実を男性一般のそれに過剰解釈して絶望するのであるが、その際に、薫も「あちら」側の人物でしかないことが大君の絶望を決定づける一つの決め手になっているといっても、あながち穿ちすぎではあるまい。そこで大君が匂宮の不実と極めつけたのは、私的の小旅行のつもりであったものが、公的な色彩を帯びてしまったために、匂宮が心ならずも立ち寄れずに帰京したものであり、匂宮が不誠実であったとはいえないし、まして男性一般の不実に拡大して考えるのは当を得ていないのは明らかである。しかし、父宮に死別して頼りにすべき後見を持たない孤立無援の大君が、一種の被害妄想風に事態をすべて悪い方にのみ解釈していかざるをえない心的状況は、極めて説得力のある描き方になっているのも事実である。もし八宮が存命であったならば、たとえ母后の厳命による公式の迎えがあったにしても、匂宮が大叔父宮を表敬訪問することは十分に可能だったはずである。匂宮の素通りの事件も、結局は父宮を亡くして宮廷社会との接点を失ってしまった救いようのない閉塞した姫君たちの境遇を、際立たせるためにこの上なく有効であり、そのゆえに大君は絶望するのであった。

椎本巻と総角巻にくりかえされる匂宮の宇治遊覧の場面は、八宮と大君がそれぞれ匂宮の栄華と対比的に捉える己れの現在という点で共通すると同時に、八宮の生前と没後という大君を取り巻く状況の変化が典型的に描き出される点で特徴的なのである。

七

右に見てきたように、椎本巻頭で匂宮が場面の主役を演じ薫が傍役に回っているのは、孤立的な挿話の域を越えて橋姫三帖、ひいては宇治十帖全体の根幹に触れる問題を孕んでいると思われる。宇治十帖が相対化された世界であるとは、いまや常識に近いものであるが、それが明確に構造化されて物語の現実として提示されてくるのが、椎本巻頭の匂宮の登場によってである、と私は考える。それというのも、橋姫巻末において薫が出生の秘密の一切を知ってしまった結果、進むも退くもできない状態に追い込まれたことに連動して、椎本巻頭の匂宮を主役とする場面がありえたと考えられるからである。先に引いた鈴木一雄氏、鈴木日出男氏の〝真相を知った後にも薫の性格にさしたる変化がない〟という指摘にもかかわらず、物語局面で占める薫の位置が橋姫巻と椎本巻とでは明瞭に変化していることは決して見過すことができない。橋姫巻が八宮家と薫の関係に絞って語られていたのに対して、椎本巻が匂宮によって代表される京の「光明」の世界の視点を導入することにより、薫と八宮のそれぞれの「暗部」が相対化され、京に対する宇治という空間の中に、匂宮－薫－八宮の多極化した物語の展開が可能になるのであった。

そこで問題は二つに分かれる。素姓にかかわる事実を知ってしまった薫という状況の後に、いかなる形で物語が伸展していくのか、そして、そのような薫をいかにして再び物語にかかわらせることが可能になるのか、である。

この第一点は、椎本巻が八宮家に視点を集める展開で解決されている。匂宮の豪勢な遊覧を対岸に望見する八宮の感慨を語るという形で、語りの基調が八宮家の側に移っていくのは、驚くべき巧妙な語り口といわなければならないだろう。橋姫巻一帖を通して八宮家の現状を伝える情報量は、意外に少ないのである。八宮が桐壺院の皇子であること、弘徽殿大后の政治的策謀に利用されたために長い失意の人生を送ったこと、などの概略が語られた他は、幼い姫君たちを男手一つで育てている哀れさが、池の水鳥に託した和歌の唱和で描かれるのみで、姫君たちの成人後のありさまは薫の垣間見により間接的に読者に知らされるだけであった。それは薫をいかにして物語内の現実にかかわらせるかが作者の第一の関心であったために、姫君たちの状況をつぶさに説明する余地がなかったからに外あるまい。つまり、橋姫巻の段階では薫に焦点が合せられていて、姫君を物語の主役として個別的に識別するには至っていなかった、ということである。それが八宮の感慨を記したあと、「姉君廿五、中の君廿三にぞなり給ひける。宮は重くつつしみ給ふべき年なりけり」（五の254ページ）と語り出されて、現在の八宮家の状態が極めて具体的に読者の前に提示されてくるのは、椎本巻が八宮家の側から語ろうとしている作者の意図の明らかな現われと解することが許されるだろう。

源氏物語全帖を通して見ても、主要人物の年齢が記されるのは必ずしも多くはなく、しかも女性の年齢が実数で記されるのは極めて

稀である。この場合でも、八宮が「重くつつしみ給ふべき年」と朧化された表現になっているのに比し、大君二十五、中君二十三と特定されているのは注目すべきものである。これに等しいものは、藤壺が薄雲巻で三十七、紫上が若菜下巻で三十七と記される例があるのみである。これらは共に死去と大病の予告であり、それ自体が厄年として不吉な象徴的な数字であるところに特徴があった。そして、ここで示される大君二十五歳もまた厄年なのであって、この時点で大君が悲劇的な主役を演ずる女性であることが読者の前に示された、と考えることが許されるだろう。その時、八宮が重く慎しむべき歳と説明されているのは、当然ながら八宮の死の予告と解せられるものであり、父宮に死別して妹君の後見の責任を負う大君が絶体絶命の窮地に追い込まれる年齢として、二十五歳の厄年という設定がこの上なく物語的なのである。しかも、大君の場合、それが単に厄年だから不吉だというばかりでなく、若さの峠を過ぎてしまった現在まで全く世間と没交渉で生きてきた女性に、これから後いかかる世の中がありうるのか、という問いかけに対する自らなる解答が含まれているところに、二十五歳厄年の最も構想的な問題がかくされている。しかし、大君論の細部に亘る考察は次の機会に譲らざるをえない。

八宮の死の予告と大君の厄年を記すことで、八宮家の側に語りの視点が移ったことが明らかになるのだが、それは大君をめぐる極限状況を語り出す用意が完了したことに外ならない。そこでの問題は、そのような八宮家の世界にいかにして薫が再びかかわっていくのかである。薫は次のようにして椎本巻の七月に宇治を訪問する。

宰相の中将、その秋中納言になり給ひぬ。いとどにはひまさり給ふ。世のいとなみに添へても、思すこと多かり。いかなる事と、いぶせく思ひ渡りし年頃よりも、心苦しうて過ぎ給ひにけむいにしへざまの思ひやらるるに、罪軽くなり給ふばかり、行もせまほしくなむ。かの老人をばあはれなるものに思ひおきて、いちじるきさまならず、とかくまぎらはしつつ、心よせとぶらひ給ふ。宇治に詣でで久しくなりにけるを、思ひ出でて参り給へり。七月ばかりになりにけり。五の255ページ

これは薫の昇進が語られる箇所であること、および弁の君から真相を知らされた薫の直接的な反応が記されている数少ない箇所であること、の二点で注目される部分である。

まず薫の中納言昇進がなぜ注目に価するかであるが、薫が三位の宰相中将と紹介された匂宮巻との連関を思うからである。この椎本巻の薫の年齢は、細流抄で二十二歳、宣長説で二十三歳である。また、この後に薫が権大納言兼右大将に進む宿木巻第三年は、細流説で二十五歳、宣長説二十六歳である。一方、匂宮巻に語られる薫は十四歳二月侍従、秋右近中将、十九歳三位宰相中将と記されているのであって、匂宮巻の昇進の速度と宇治十帖に入ってからのそれとの間には、かなりはっきりした段差が認められている。すなわち、匂宮巻における官位は、おおよそ光源氏の官位昇進に準じたものとして設定されているのに対して、中納言から大将へと進む薫の年齢は、正篇での光源氏や夕霧の前例から離れているところに注意した

いのである。光源氏が大将に任ぜられたのは「(二十に)一つあまりて」であり、夕霧の中納言昇進は「(二十に)まだわずかなる程」であり、大将就任は若菜上巻での光源氏四十賀の折であった。

このように匂宮巻での薫の昇進が光源氏に比肩できるものであったのに、宇治十帖に入ってから急に薫の出世が遅くなっている現象は、匂宮三帖と宇治十帖との間に薫を描く上での方針の変更があったことを窺わせるものがある。細かな論述は省いて、本稿の意図する範囲であえて結論的に言うならば、それこそが京に対する宇治という相対化された物語空間の発見に直結していると考えられるのだ。匂宮巻では、光源氏の子息として光源氏に等しい異例の栄進を遂げているという事実の下に、光源氏の実子ではない疑惑に深く捉われる貴公子薫が存在していた。いわば明るさの中での暗さでもって薫を描こうとしていたということができるのに対して、橋姫巻以下の物語では、出生の疑惑に捉われる反俗の貴公子の生きうる世界として、京に対する宇治という明暗の対比を空間的に構造化することに成功したために、京を支配する宮廷秩序が物語進行の第一原理でなくなってしまっている。それが宇治十帖に入って急に薫の昇進の速度が鈍っている理由なのではあるまいか。

椎本巻の秋は、薫が宇治に通うようになって足かけ四年の歳月が経過しているのだが、その間の宮廷事情について作者はほとんど無関心の如くである。物語の薫が宇治八宮の存在を知り、宇治に通うようになって三年が経ったと記したところから、薫と大君の具体的な物語が開始されているのであって、足かけ四年とはいっても実質的には橋姫巻の晩秋から数えて十ヵ月ほどの内容にすぎない。それゆえ、この十ヵ月の間には薫の昇進を語る余地がなかった、というのが実情と考えてよいであろう。つまり、橋姫巻での三年経過を含めて薫の昇進を記す局面がこれまでなかったために、薫は光源氏や夕霧に較べて昇進が遅れる結果になった、と言えるように思われる。同様のことは薫の任大将が語られる宿木巻にも当てはまるのである。同帖は大君逝去で中君が二条院に迎えられた事態を語る巻なのであって、宇治十帖としては例外的に京中心の一帖になっているのである。つまり、宇治を中心に事件が展開する物語状況にあっては、官位といった宮廷秩序を特記する必然がないのであって、昇進はどうしても副次的にならざるをえないのである。たとえば、薫の任大将が語られる宿木巻は、薫と匂宮の婚姻が語られる巻でもある。厭世的な薫が晩婚であるのはともかくとして、匂宮の結婚問題はすでに早く匂宮巻で話題になっていたものであり、それがやっと宿木巻で実現するというのは、物語的なご都合主義以外の何ものでもない。だがそれは、この宿木巻に至るまで匂宮の結婚を語らなければならない必要がなかったということであり、物語の緊張は宮廷貴族の日常性でもある官位や婚姻とは全く別な次元で作り上げていた反面と捉えられるのだ。官位や婚姻の如き人生史的なパースペクティブで人物を描くのではなく、個々の事情を抱えこんでいる人間相互の関係を通して、事件本位に物語が進行している続篇世界の構造原理が、それらによってほの見えているのだ。

しかして、椎本巻での薫の中納言昇進が、久しぶりに彼が宇治訪

問を思い立つことに表裏している点に、格別の注意を向けたいと思う。表裏しているというよりは、中納言昇進が宇治を訪れるきっかけに利用されている、というのが前引の物語状況である。先の引用で薫が「いぶせく思ひ渡りし年頃よりも」もっと「行もせまほしく」思うようになったというのは、橋姫巻末で薫の受けた衝撃の大きさに直接言及している数少ない部分である。もっとも、この程度の反応しか示さないのであるから、薫の受けた衝撃を誇大に考えるのは深読みである、という解釈もありうるだろう。しかしながら、心には出家遁世を思いながら実行できずにいるために、その分だけ内向の度合いが深まる薫という読み方も許されるのではあるまいか。

ここで「行もせまほしくなむ」と思う心が、必ずしも宇治訪問に結びつくものではない点に注意したい。以前の薫は京の世界を住み憂く思う心が、そのまま八宮を法の友として宇治への道を辿らせるものに作用していた。この場合、弁の君に対してはしかるべき見舞いを欠かさないというのであるから、薫がこれまで宇治を訪れなかったのは、秘密を握っている弁の君に会うことを避けたためとは考えられないのであり、薫は真相を知る以前の大君に心動かされた状態に立ち戻ることを、自らに禁じてここまで宇治訪問を行わなかったと考えてしかるべきであろう。つまり「行もせまほしくなむ」と思う心が、むしろ宇治へ赴く心を押える力に作用しているといえるのである。椎本巻頭で匂宮の迎えに宇治へ出向く薫は、宰相中将としての公人の行動であって、自ら例外である。だから、前節で見た鈴木日出男氏の所説――弁の君が薫を宇治に引き寄せる役割で描かれているということ――は、八宮薨去後の物語には適合するものではあっても、この段階では当てはまらない。つまり、大君の存在と弁の君の存在が別個にせめぎあっていて、結局、宇治訪問を決心するには至らなかった、というのが橋姫巻末から椎本巻の七月までの期間なのである。

薫が自発的に宇治を訪れる気持になったのは、弁の君の存在が気になったためではなく、まして大君を恋しく思うせいではなく、中納言に昇進し身の栄華が加わるにつけ物思いが募ったからである、と説明されているところに椎本巻の薫の実体がある。極言すれば、薫は中納言にならなかったならば、宇治訪問を思い立たなかったのである。柏木の文反故により事実の全てを知り、そのために「行もせまほしくなむ」と独り鬱々と日を送る状態であったものが、秋の除目で中納言に任ぜられるに及んで、そのまま何食わぬ顔で栄華に浸るにしのびず、再び反光源氏の日蔭の人生を送った八宮の暗さに吸い寄せられるようにして、宇治への道を辿るというのが、この場面と理解されるのである。その意味では、橋姫巻で初めて八宮の存在を知り、宇治を訪問した時の薫の状態に極めて近似した心的状況でもって、薫の宇治訪問が語り出されているといえるだろう。

それゆえに、椎本巻七月に薫が宇治へ赴くのは、形の上では橋姫巻末を引き継ぎ、改めて薫と大君の物語の流れに復帰していることになるのであるが、薫が真相を知ってしまったこと、大君恋しさのために宇治へ向うものでないことなど、橋姫巻後半部での薫の宇治訪問とは明らかに異なる状況になっている。

八

久しぶりに訪れた薫を八宮は熱烈歓迎するのであるが、そのありようは椎本巻頭から語られていた八宮家の閉塞した状況の具体的な表現になっている。つまり、物語の基調はあくまでも八宮の側に委ねられており、そこに薫がかかわっているところに物語局面を展開させる原動力が仕掛けられていると考えられる。言い換えれば、八宮と薫の各々に固有の事情が与えられているのがポイントになる。これが正篇物語であれば、光源氏にかかわる特別な事情、たとえば夢告によって未来が予見されることは、そのまま物語の未来を意味するものであった。しかるに、宇治の物語では各人物がそれぞれ特殊な状況を背負うことで限定された個人として描かれるものになっているのである。死を予感して己れなきあとの姫君たちの行く末をひたすら憂う八宮と、出生の秘密の全てを知ってしまった薫の、それぞれの事情について読者は十分の了解に達しているにもかかわらず、各々は自分のことで精一杯でとても他を慮る余裕がない、その喰い違ったあやにくな物語状況に一種のサスペンスが生ずる仕組みになっている。それは橋姫三帖に限ったものではなく、更に徹底したものとして後の浮舟をめぐる物語展開があり、それこそが個々の事情に縛られる個人を描く相対化された続篇世界の必然というべきものと思われるが、詳細に亘る考究は他日を期さなければならない。

それはともかくとして、十カ月ぶりに単独で訪れた薫を待ちうけていた八宮は、ほとんどなりふり構わない積極的な言動でもって、薫を婿がねの如く遇する。橋姫巻における両者の対面と、この椎本巻で今生最後の対面となった八宮と薫の関係については、前稿でいささか考察を加えたところであり、[注13]ここに再述するのは避けたいと思う。ただ、本稿で注意しておきたいのは、橋姫巻での対面では薫の側に主導権が与えられていたのに対し、この椎本巻の両者の関係では、明らかに八宮が積極的であり、薫と大君との結婚を黙許するという以上に、切望していると読み取れる点である。それは薫の側に即していえば、前回の八宮との対面で姫君の後見を承諾した直後に、弁の君との再会により秘密の真相を全て知らされてしまったという状況が介在しており、薫はすでに前回の薫ではなくなっているといわなければならないのである。そしてまた、死期の近い予感を持つ八宮としては、何とかして姫君の将来の目途をつけておきたい衝迫が、橋姫巻の対面とは全く異なる八宮の言動の根底にある。

しかして、橋姫三帖の物語展開の中で、この薫と八宮の最後の対面の場が注目に価するものであるのは、この直後に八宮が姫君たちに向って父宮亡きあとに生きるべき心構えを諭す場面があるからである。八宮の遺言となった訓戒については、これまでも先覚諸家の多くの論考があり、私も先に若干の考察を加えている。八宮が薫に姫君との結婚を懇請するような言動をする一方で、姫君に対しては聞きようによっては独身を貫くことを希望しているような訓戒、少なくとも宇治の地を離れるなという戒めとして明瞭な内容の遺言を与えているのは、矛盾に近いものがあることは否定できなかろう。

それが矛盾でないことは確かなのだが、結果的に大君は遺言に縛られる展開となるのであった。八宮が薫に向って姫君の後見を遺言する一方で、姫君に対しては別は遺言を残すところに、椎本巻が八宮家の側から語り出されている明らかな証拠の一端がある。

橋姫巻から椎本巻への物語展開を事件的に捉え直すならば、橋姫巻での垣間見により薫が大君に心惹かれていくのに表裏して弁の君が出現するという、プラスの要因とマイナスの要因が一対に組み合せられ、捩り合わされて伸展するパターンの執拗なくりかえしである、といって過言ではない。すなわち、橋姫巻での再度の訪問で八宮と対面した薫が、姫君の琴をゆかしがることに端を発して、薫が姫君の後見依頼を承諾した直後に、弁の君から柏木の文反故に代表される決定的な事実を知らされるのであった。そして、椎本巻で十カ月ぶりに薫が宇治を訪れたとき、八宮の熱意に押し切られる形で姫君の後見を約束したとたん、今度は八宮の厳しい遺言と死去が語られるのであって、大君が決定的に縛られざるをえない展開になっているのである。

この物語展開の経緯は、薫と大君との間に未来的な展望が拓けかかると、それをぴしゃりと潰す事件が生じ、次に別な角度から新しい発展の可能性が生れかかると、それを押し潰す強力な力が作用して、結局は薫も大君も共に身動きのできない状態で固定されるもの、と把握することができるだろう。もし柏木の文反故がなくて八宮の後見依頼だけであったと仮想すれば、薫は全く別な人生を持ちえたかもしれない。そしてまた、もし薫が柏木の文反故に縛られるだけであったならば——八宮の遺言となった姫君後見の依頼がなかったと仮定したならば——、薫はただひたすら憂愁に沈む貴公子でしかなく、総角巻の物語展開は考える余地のないものである。そのような薫の状況はそのまま大君にもあてはまるのであって、もし大君が父宮の遺戒に縛られるだけであったならば——父宮が薫との結婚を切望した事実が先行していなかったならば——、大君はためらうことなく独身を貫けたはずである。そして、父宮の宇治の地で朽ち果てよの訓戒がなく、薫との結婚を願っていた父宮の遺志のみが語られるものであったと仮定したならば、大君はもっと素直になりゆきに身を委ねることができたはずである。

いま私は、〝もし〟という仮定をくりかえしてきたのであるが、与えられた物語作品を仮定で論じることがいかに不毛であるかは十分に承知しているつもりである。ただ、ここで私が注目したいのは、橋姫三帖の薫と大君の物語がいかに密接な相互交渉で成り立っているかという一点に関してである。たとえば右に述べてきた〝もし〟を逆転させて、柏木の文反故も八宮の遺言も共になかったと仮定しても、そのために薫や大君に全く別の人生がありえたかとなれば、その答は明らかに否定的なものとなる。柏木の文反故がなくても、その時の薫はすでに秘密のほぼ全容を察知していることに変りはない。そしてまた、大君も八宮の遺言の有無にかかわらず、父宮の不遇な境遇の下で世間から完全に遮断された生い立ちに、いかなる人生の選択がありえたかは自ら明らかなものがある。だから、柏木の文反故にせよ八宮の遺戒にせよ、それぞれ屋上屋を架する底のもの

にすぎないという捉え方も許されるかもしれない。その意味では、前引の鈴木一雄氏の所説――柏木の文反故は薫像の「念押し」であり「追認」にすぎないと論じられたもの――は、一面の真実を衝くものである。しかし、それが「念押し」であり「追認」であることが意味を持つのは、ひとり薫像の問題にとどまらず、大君像の問題としても八宮の遺言が念押し確認の機能を帯びて、そこで相似形の運命に縛られる一対の男女の物語としての総角巻への展開が可能になった点が重要であると思われる。換言すれば、柏木の文反故も八宮の遺言も、その背景になっている幅広い物語状況を踏まえて、ほとんど象徴的な意義が与えられて、一対に組み合せられているところに、橋姫巻の薫、椎本巻の大君の描かれ方の実際がある。

九

その場合、本稿の最初に指摘した橋姫三帖にくりかえされる三つの場面の一つ、薫の姫君たちを隙見する事件が椎本巻末に描かれているのも、右に見てきた物語状況の展開――プラスの要因とマイナスの要因の交錯で進行している――と、一連であることに注意したい。この隙見が橋姫三帖に語られる唯一の夏の場面であることは先に言及した。だから、物語の流れでいえば、椎本巻のハイライトである八宮薨去前後を語る秋冬の場面から、総角巻の秋へ〝つなぎ〟として夏の挿話が挟まれている体裁になっている。事実、椎本巻の後半部は八宮逝去を悼む姫君たちの嘆きが中心に語られていて、喪に服する一年であるがゆえに何ら事件契機を含むものではないのであり、隙見の場面にしても薫の目を通して捉えられる喪服姿の姫君たちが、静的絵画的な挿話場面を形作っていると把握することは一往は可能である。

しかしながら、そもそも薫と大君の物語が橋姫巻での垣間見から開始されたものであることを思うならば、この隙見の一件を単純に〝つなぎ〟の挿話とのみ解するわけにいかないのは、あまりにも当然であろう。橋姫巻の垣間見から一年余を経て、薫が再び隙見の偶然に恵まれるというは、極めて作為的な設定であるのは確かである。その隙見の場面では薫の心情に関して格別の説明はつけられていないが、喪服姿であることがかえって今めかしいと感ずる薫は、改めて大君への思慕を募らせ、とてもこのままでは済みそうにない予感を読者に与えるものになっているという意味で、薫と大君の物語の次なる新しい展開のための弾み板になっていると考えてしかるべきであろう。それというのも、この隙見の事件に先立って、年末に宇治を見舞った薫が物越しで大君と対面した際に、次のような感想を抱くことが語られているからである。

……うちとくとはなけれど、さきざきよりはすこし言の葉つづけて、物など宣へるさま、いとめやすく、心はづかしげなり。かやうにてのみは、え過しはつまじ、と思ひなり給ふも、いとうちつけなる心かな、なほ移りぬべき世なりけり、と思ひ居給へり。五の278ページ

これは八宮の亡きあとに薫が誠意を見せて見舞うことで、大君も「浅

うはあらず思ひ知られ給へば、例よりは見入れて、御座などひきつくろはせ給ふ」（277ページ）という状態をうけ、大君が以前にくらべて親しみ深く言葉も多く薫に接したことで、薫が改めて大君の人柄の魅力に強く惹かれ「かやうにてのみは、え過しはつまじ」の予感を己が心に思う、という場面である。

これ以前の薫は、八宮の薫に対する遺言となった懇ろな後見依頼の時にも、

わが心ながら、なほ人には異なりかし、さばかり御心もてゆるい給ふ事の、さしもいそがれぬよ、もて離れて、はたあるまじき事とはさすがに覚えず、かやうにて物をも聞えかはし、をりふしの花紅葉につけて、あはれをも情をもかよはすに、にくからずものし給ふあたりなれば、宿世ことにて、外ざまにもなり給はむは、さすがにくちをしかるべく、領じたる心地しけり。五の259ページ

と語られる如く、己れと大君との関係を「もて離れ」たものとは思わないものの、決して現実的な深い関係を希求しているものではなかったのである。八宮が姫君と薫の結婚を切望している状況であるために、かえって熱心になれないという一面もあるが、結婚という密接な関係の一歩手前のところに留って、折にふれて心を通わし合う間柄でありたいと願う薫の心に、私は柏木の文反故によって代表されるものの直接的な影響を読み取りたい。しかして、椎本巻の年末に対面した時の薫は、右に願っていた状態に接して、改めて「かやうにてのみは、え過しはつまじ」と思うのである。右の引用での「もてはなれて、はたあるまじき事とはさすがに覚えず」とくらべるならば、「え過しはつまじ」は明らかに一歩踏み込んだ心の動きになっている。その場合に注意したいのは、このような薫の心の変化の直接の動機が、八宮薨去という大君の身辺におきた重大な事件であったことである。椎本巻年末で薫が「かやうにてのみは、え過しはつまじ」の如きかなり積極的な予感を持ったときの大君は、すでに父宮の厳格な遺戒に縛られる身として、未来に向って何ら期待を持ちえない心的状況にある。しかも喪に服していて薫の懇ろな弔問に対して素直に感謝する態度が、薫には改めて強く心惹かれるものに動くのであり、これまた、どうしようもなく喰い違ったあやにくな状況になっているのである。まさにプラスとマイナスが常に連動して物語局面を動かしている。

先に引用した「かやうにてのみは、え過しはつまじ」、「なほ移りぬべき世なりけり」の薫の心情は、橋姫巻での垣間見の折の「げにあはれなるものの隈ありぬべき世なりけりと、心移りぬべし」（五の226ページ）、その翌朝帰宅して「をかしかりつる御けはひども、面影に添ひて、なほ思ひ離れ難き世なりけり、と、心弱く思ひ知らる」（五の235ページ）とあったものと同型の心の動きであるのは、一読して明らかであり、これまた、〃くりかえし〃と言わなければならないものである。すなわち、椎本巻の年末に薫が大君と物越しで対面して、とてもこのままで済みそうもない予感を抱くのは、橋姫巻で初めて姫巻を垣間見、言葉を交した折に強く意識した感情の再現に外ならないのであり、めぐりめぐって再び物語の出発点に立ち戻っ

たというべきものである。しかし、あまりにも当然のことながら、物語はこの間に柏木の文反故と八宮の薨去（遺言）が介在しているのであって、全く同じ状態に立ち戻ったのではなく、各々の運命に縛られる二人の男女の新しい局面が始まろうとしていることの予告が、すなわち薫の予感なのである。

年末におけるこのような物語状況が先行していて、しかるのちに巻末の隙見の場面が描き出されているのは、このままで済みそうもない薫の予感が更に一歩強固なものになっていく踏み板と解せられるのだ。年末の場面が物越しでの対話で人柄のゆかしさが主であったものを受け、ここでは薫の目に映じる姫君の容姿、挙措動作のゆかしさが、薫の予感を一層募らせると読んで間違いはあるまい。隙見の場面は、薫の視線を通して姫君たちの清楚な喪服姿が読者に提示されてくるものであり、そこで薫がいかなる感情に襲われたかの説明は一切省かれている。だが、前引の年末における薫の予感との関係で見るならば、薫が姫君を凝視する主体として描かれている点にこそ注目すべきであろう。作者の客観的な描写で姫君の魅力が説明されるのではなく、薫が凝視する姫君たちの可憐さによって、ここでは読者の側が、薫と大君の仲がこのままでは済まないにちがいない予感と期待を持つことを、作者は計算しているものの如くである。

右の如き椎本巻での対話と隙見によって二段構えで高められた薫の予感—読者の期待—が、一気に現実のものとなるのが総角巻発端の一夜である。そこで最も注目すべき点は、総角巻が八宮の一周忌の直前、未だ姫君たちの服喪期間があけない時点から始められていることである。それは右に見てきた椎本巻での薫の予感のあまりにも性急な実現であったといわなければならず、このことが以後の薫と大君の物語を決定づけるほとんど象徴的な意味が託されている、と考えられるものになっている。先に吉岡曠氏の高見を引いて、一般に大君の結婚拒否と称せられている物語展開は、反面において大君を実力で犯すに至らなかった薫の物語であることに注意したのであったが、総角巻一帖の濃密な心理描写を主とした葛藤の発端が、八宮の喪があける直前であったことは注目に価するものである。もし薫が喪のあけた大君に迫りながら、遂に何ごともなく一夜が明けたと仮定するならば、その時にこそ吉岡氏の主張される大君の絶望という解釈が有効性を持つであろう。だが、そこで薫が大君を実力で犯すに至らなかったのは、喪服に象徴されれものへの憚りのゆえであり、薫が性行為に及ばなかったこと自体は決して不自然ではない。ここでの問題は服喪の期間中であることを承知していて、それでもなお薫が屏風を押しあけて侵入した点にある。その場面の逐条的な検討をする余裕は今はないのだが、一周忌の準備のための見舞いに薫が訪問したものである以上、薫が知らなかった訳はない。また、千載一遇の好機に我を忘れて暴発したものでもなく、薫は冷静に振舞っている。たしかに、その直前に弁の君との長々とした対話があり、徐々に薫の感情が昂揚していく経過は見事に語り出されているのではあるが、薫が服喪中の大君を犯すほどの無鉄砲な激情家でないことは、これまでの人物造型で明らかになっている。つまり、

薫は大君が服喪中であることを十分に承知していて、というよりも服喪中の大君であるがゆえに、屏風を押しあけて室内に侵入し腕にかき抱くという思い切った行為に出ることが可能であった、と読むことが許されるのではあるまいか。柏木の文反故によって刻印されている薫自身の運命から彼は決して自由ではないのであって、野放図な直接行動に出れる人物ではない。その薫が彼としては珍しくあわやという場面の主役を演じえているのは、喪中であるという厳粛な歯止めがかかっていたためであると考えられるのである。薫の側に大君と結ばれえない時期という歯止めの意識が働いていて、その上で侵入したと解くか、或いは情熱で理性を失って迫ったものの、喪中であることが辛うじで薫の暴発を押えたと解くか、極めて微妙でありいずれとも決しかねるものがある。しかし、八月下旬喪のあけた時に薫が再訪し、再び姫君の寝室に侵入したときには、いち早く気配を察知した大君が壁際の屏風の裏に身をかくすのであって、遂に二人の結ばれる展開はありえなかったことを思うならば、総角巻の発端の一夜が薫と大君の物語を決定づけるものであったことは確かである。

十

総角巻発端の一夜は、椎本巻における薫の年末の宇治訪問の際の予感、および巻末・夏の隙見の延長線上に位置しているといえる。すなわち、大君の人柄のゆかしさから「かやうにてのみは、え過しはつまじ」の感想を抱いた薫は、更に隙見によって大君の容姿のみならず挙措動作のゆかしさを確認するのであって、これらの先行体験がなかったならば総角巻発端の一夜の出来事がありえなかったのは疑えないであろう。それはまさに予感が現実になったものであるのだが、その薫の求愛が大君の喪中期間内であったところに、未来を生み出してくる行動に飛躍できない薫の本性が、はしなくも露呈しているのであった。椎本巻の薫が大君に積極的な情動を寄せるのは、八宮薨去の後のことであって、それ以前の薫が大君との結婚に消極的であったのは前節で見た通りである。父宮に死別して大君が身動きできない状態に陥込んだのを見すますようにして、薫が能動的な関心を持つようになっていくのであったが、それが結果的には喪中の求愛というあやにくな展開となって、薫はありえたかもしれない未来の可能性を自ら摘み取ってしまうのである。というよりも、喪中で実事には及べない状況のゆえに、逆に安心して大君に迫ることができた薫、と読み取ることも許されるだろう。そこに薫を縛ってはなすことのない運命的な暗さ——出生の秘密——が浮び上ってくる、と私は考える。そこに吉岡氏の説かれる「現実喪失者」としての薫像がある。つまり、薫のあらゆる行為が常に裏目裏目に出てしまって、どのようにあがいても未来を生み出してくることができない人物像として、薫は物語の内にしか存在しない特別な人物なのである。薫はまさしくマイナスの符号を負った理想人物といわなければならないのである。光源氏が理想人物であったのは、外側から理想人物のレッテルが貼られていたゆえではなく、彼自身の行動で

自分の未来を生み出してくること、換言すれば物語内の独自の現実を所有することであったのに対して、薫は遂に独自の未来＝現実を持ちえない人物、過去に縛られて後向きでしか生きえない人物として特立している。それは夢浮橋巻まで貫かれる造型になっていると考えられるのだが、その具体的な考察は他日に譲りたい。

橋姫三帖の核心は、橋姫巻後半部の薫が大君に心惹かれている経緯が、そのまま出生の秘密の確認に重層している点にある。それは単に薫が柏木の文反故で真相を知らされることで重要なのではなく、柏木の文反故に見合う八宮の遺言が椎本巻で語り出される契機も、橋姫巻にすでに用意されているからである。八宮が遺した生きる上での厳格な心構えは、八宮の敗者としての全人生から析出したという意味で、橋姫巻に紹介されている八宮の閲歴に内包されていたといわなければならない。つまり、柏木の文反故によって薫像を確定したとき、その薫に見合う女性として八宮の遺言に縛られる大君像を語り出し、全ての点で相似形で釣り合う一組の男女の物語として、おもむろに総角巻の物語へと語り進めることができたのである。橋姫巻と椎本巻は薫と大君のそれぞれに焦点を合せて語っているのであり、その意味では等価で並立している関係、比喩的には〝並ぶ〟形で総角巻に対していると捉えることができる。

その意味では、本稿の冒頭で指摘した三つのくりかえされる事件・場面の問題は、本質的には柏木の文反故を語る橋姫巻の晩秋から初冬の場面と、八宮の遺言薨去を語る椎本巻の秋から冬にかけての場面との組み合せに、付属し従属するものといわなければなるまい。三帖が三つの秋冬の場面のつみ重ねで成り立つとは、薫像・大君像のそれぞれを抜き差しならない形で確定してきて、その出口のない必然的な展開としての総角巻の大君の死に収斂していくもの、と最終的に認定される。

行動を失ってただひたすら内向し屈折する心理を持て余す貴公子を主役にする物語が、物語史上空前であるのは勿論として、そのような薫を主役とする物語が、物語としての実質を確保できたのは、一にかかって薫に相似形の大君像を創出できたからである。その意味では、橋姫三帖を大君物語と称するのもあながちゆえなしとはしないのだが、大君像はあくまでも薫像を前提にして要請されたものと考えられるのは、見逃すべきではない。（もっとも、光源氏没後の物語を語り出そうとしたときの作者が、薫の必然を語ることに第一目的を置いたか、それとも薫のような主役に配する女性の側に力点を置いていたかは、軽々に論断できない課題である。大君から中君を中継して浮舟へと伸びる宇治十帖の全体を見通して考究しなければならない問題である。）

当面する問題は、薫に見合う女性として大君を必要としたと考えても、大君像を描き出すために椎本一帖を丸々費し、極めて個別的な状況設定を行っていることの特異さである。正篇物語にあっては、このような女性の描き方はたえてなかったことに注意したいと思う。正篇では光源氏世界という大きな枠組み——光源氏の巨大さ——が先在して、女性個々の必然は問題になることが少なかった、という一面がある。血筋や家柄など生い立ちの最小限の説明があれば事足

りていたのは、それらが〝類型〟として捉えられていたからであろう。たとえば、正篇に登場する女性の中で際立って特殊な生い立ちを持つ玉鬘は、その特殊さが玉鬘の人柄に格別の翳を落すものにはなっていないのであり、女三宮の場合ならば、藤壺の妹宮の姫宮としてもう一人の紫のゆかりという背景の説明と、朱雀院の鍾愛する姫宮として片なりで心幼い女性という属性の説明があれば、それで十分だったのである。それらにくらべた場合、宇治の大君は八宮の敗者としての人生の中で生い立ったという特殊な境遇――それは「宇治」という土地で象徴化されている――に加えて、八宮の遺言や薨去の際の阿闍梨の厳格な扱いなどの個別的な事情が綿密に語り出されていて、それらの状況設定の下で孤立する個人でしかないことが、明確に提示されている。これはたとえば桐壺一帖を宛てて光源氏の生い立ちを語っているものに近似した語り口といわねばならず、物語を領導する主人公の扱いといって過言ではない。薫と一対に設定された大君の特立する人生に託された問題とは何か、それは想を新たにして次の機会に譲りたい。

注1　拙稿「源氏物語・橋姫巻論――弁の君の登場をめぐって――」（「平安文学研究67輯、昭57・6）

注2　拙稿「薫と大君の物語――橋姫巻から椎本巻への展開――」（「文学」昭57・8）

注3　拙稿「薫と大君の物語――薫と八宮の最後の対面をめぐって――」（「藤女子大学国文学雑誌」31、昭58・6）

注4　清水好子氏「源氏物語の主題と方法――若菜上・下巻について――」（『源氏物語研究と資料・第一輯』武蔵野書院、昭44）のち『源氏物語の文体と方法』（東大出版会・昭55年）に収録

注5　注3の拙稿

注6　吉岡曠氏の薫論は氏の主著『源氏物語論』に収められた何篇かの論文があるのだが、ここでは吉岡氏の最も新しい発言として「源氏物語必携II」（学燈社、昭57）中の「大君」に依った。

注7　吉岡曠氏『匂宮巻における薫像』（学習院大学文学部研究年報11」昭40）、のち『源氏物語論』（笠間書院、昭47）に収録

注8　使用するテキストは、朝日新聞社・日本古典全書『源氏物語』である。

注9　鈴木一雄氏「橋姫、椎本、総角、早蕨、宿木」（『源氏物語講座第四巻』（有精堂昭46）、同書113ページ

注10　鈴木日出男氏「薫大将」（『源氏物語講座第四巻』（有精堂、昭46）、同書165～166ページ

注11　清水好子氏「薫創造」（「文学」昭32・2）

注12　森岡常夫氏「源氏物語の自然」（『源氏物語の研究』清水弘文堂、昭23）

注13　注3の拙稿